

主 題：主の力によって生きる日々3

聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章24節－2章7節

私たちは主の力によって生きるということを学んできています。困難の中のあっても主に従い続けたパウロ、そのパウロの歩みを支えたものがいったい何だったのか、私たちは見て来ました。

- I. 困難の原因と目的を知っていた
- II. 主からの務めを知っていた、主が大切な務めを彼を信頼するゆえに託してくださったこと
- III. 神から与えられた語るべきメッセージを知っていた、だから、彼は妥協することなく神の真理を忠実に語り続けたのです。

なぜ、パウロはこの働きを忠実にしない続けたのかを私たちに教えてくれました。それは、みことばによってイエス・キリストを信じるクリスチャンたちが、信仰において成長するからである、同時に、まだこの救いを受けていない人が、救いに至るからであると。パウロは知っていたのです、どんな時代にあっても、また、どこにあっても必ずみことばの真理から外れて行く、そんな時代がやって来る、そのようなことを教えて人々を惑わす人たちが存在するという。パウロの時代にもそのような人たちはいました。だから、パウロはテモテに対して「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」(Ⅱテモテ4:2)と仰うのです。そして、今私たちが置かれているこの国でも同じことを見ます。人々はこの神の真理というものから遠く離れてしまう、そのような傾向があるのです。だから、こういう時代だからこそみことばの真理をしっかりと語るべきであり、しっかりと聞かなければいけないのです。

さて、私たちはテキストとして1:24から学びましたが、もう一度24-29節を読みましょう。

「24 ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。25 私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。26 これは、多くの世代にわたって隠されていて、いま神の聖徒たちに現わされた奥義なのです。27 神は聖徒たちに、この奥義が異邦人の間にあってどのように栄光に富んだものであるかを、知らせたいと思われたのです。この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。28 私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。29 このために、私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。」、困難の中で忠実に歩み続けたパウロはその秘訣を私たちに教え続けてくれています。パウロは私は神から大切なメッセージを預かったのだからそのメッセージを忠実に伝えて行かなければならないと。そのメッセージを語るにあたっていくつかの注意事項をこの箇所でお知らせするのです。特に、二つのことを彼は言っています。

☆ メッセージを語る時の注意事項

1. 主題(テーマ)を忘れてはいけない

何がメッセージの中心なのか、そのことを決して忘れてはならないと言います。28節でこう言います。「私たちは、このキリストを宣べ伝え、」と、イエス・キリストが彼のメッセージの中心だったのです。パウロはⅠコリント1:23で「私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。…」と教えています。また、Ⅱコリント4:5でもこう言います。「私たちは自分自身を宣べ伝えるのではなく、主なるキリスト・イエスを宣べ伝えます。…」と、だから、明らかなことはパウロのメッセージの中心はイエスでした。彼はこのイエス・キリストだけを伝えようとしたのです。そして、彼は大胆に、忠実に伝えました。私たちがしっかり覚えておかなければいけないことは、私たちが伝えるべきメッセージは私たちの考えや理想ではなく、キリストについてです。28節に「宣べ伝え」ということばが出てきますが、これは宣伝する、告げ知らせる、という意味をもったことばです。それをパウロたちはしたのです。イエスのことを人々に告げ知らせたのです。イエスがどんなに素晴らしいお方であるかということの人々に知らせたのです。しかも、この「宣べ伝える」という動詞が現在形で記されているのは、パウロたちがそのことを習慣的に継続的に行なっていたということを教えるのです。そして、28節の最初に「私たちは」とあり、このような働きを行なったのはパウロだけでなく、私たち複数の者が行なったと言うのです。もちろん、この教会を生み出したエパfrasもこの中に含まれていたでしょう。神によって救われた者たちがしたことは、私たちのような者を罪から救い出してくださいましたこの偉大な救い主、唯一の主であるイエス・キリストのことを人々に告げ知らせた、宣伝して行ったのです。イエスは素晴らしいお方である、人類にとって唯一の希望であるということをお断りに忠実に語り続けたのです。これがクリスチャンの使

命です。このような働きを神は牧師や宣教師たちだけに与えたわけではありません。イエス・キリストを信じるすべての人に神が望んでおられることは、まさにここに記されている通り、イエスを信じたあなたが出て行ってこのすばらしい救い主イエス・キリストを人々に告げ知らせ続けて行くことです。

さて、パウロはここでどんなふうに伝えて行くべきなのか、また、彼自身がどのようにこのキリストを伝えて行ったのか、二つの動詞でそのことを教えています。28節に出て来ます。一つは「あらゆる人を戒め」とあるこの「戒め」という動詞です。もう一つはその次に出て来る「あらゆる人を教えて」とある「教える」という動詞です。パウロは実際にどのようなことを行なったのでしょうか？

(1) **戒め**＝このことばは「警告する、忠告を与える、訓戒する、諭す」という意味をもったことばです。パウロ書簡の中には8回出て来ます。それ以外の新約聖書にはあと1回このことばが出て来ます。パウロがミレトというところにいたとき、エペソの長老たちを招きました。そして、パウロは彼らに大切な重要な忠告を与えます。使徒の働き20章に出てきますが、それはこれまでもそうだったがこれからも必ず教会の中にはいろいろな惑わす人々が入り込んで、教会を混乱に陥れるということを警告したのです。20：29をご覧ください。「**私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中には入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。**」と、30節にも「**あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。**」と、このことをパウロは警告しているのです。しかし、31節を見ると彼がこのような確信をもっていたその根拠が記されています。「**ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。**」と、つまり、パウロがこのエペソの町にいた三年間、実はもうエペソの教会の中にこのような問題が起こっていたのです。教会の中にいろいろなことを持ち込んで人々を惑わすような人たちが入り込んでいたのです。はっきりしていることは神のみわざが為されようとするとき、教会が神のみことばに忠実に歩んで行こうとすると、必ず悪魔はそれを阻止します。パウロはそのことを知っていました。実際に経験していたのです。だから、確信をもってエペソの長老たちに言えたのです。必ずあなたの教会の人々は惑わされて行く、惑わすような人々が入り込んでくると。だから、自分自身と群れ全体とに気を配りなさいとパウロは28節で言ったのです「**あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。**」と。この使徒20：31で「**あなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来た**」というこの「**訓戒**」ということばは、今私たちが見ているコロサイ1：28の「**戒め**」と同じことばです。つまり、パウロはそのような間違っただけの教えを持ち込む人々によってクリスチャンたちが混乱し、罪を犯してしまうような結果を見たとき、パウロは彼らを戒めた、訓戒を与えた、警告を与えたのです。それは間違っている、それは神に対する罪だということをパウロは3年もの間、警告し続けたと言うのです。この「**戒め**」という動詞も現在形です。パウロは訓戒を与え続けたのです。そして、このコロサイ1：28を見ても、エペソの教会だけでなく到るところでパウロはそのように為し続けたのです。継続的に罪を犯している人々を戒め続けたのです。罪を犯しているクリスチャンたちがその罪から離れて行くようにと、そのような働きをしたことをパウロは教えてくれます。

確かに、パウロ書簡を見て行くと、パウロはこのエペソやコロサイだけでなく様々なところで同じような働きをしています。たとえば、テサロニケの教会の人々に対してIテサロニケ5章でこのように教えています。12節「**兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあつてあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。**」、同じ14節「**兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。**」、「**気ままな者**」とは不注意な者とか列を離れる人のこと、兵士が自分の好きなように行進する、そのような意味をもったことばです。そのような人を戒めなさい、そのような人に対して警告を与えなさい、とこのように教えたのです。ガラテヤ人への手紙にも出て来ます。6：1「**兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。**」と。ですから、パウロはどこでもこのようなことが起こっていたゆえに、また、実際に起こっていたゆえに警告を与えたのです。

パウロはどのように戒めを与えたのでしょうか？明らかなことは、神のことばを語るとき、神ご自身がそのような働きを為すのです。神のことばを語って行くときに、不思議なことに神はそのみことばを使って人々の心の中に働きます。ですから、教会に来てみことばを聞いて心が責められるというのはそのことです。聖霊なる神は神のことばを使ってそれぞれの心の中に働きをなすのです。「**聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。**」(IIテモテ3：16)とある通り、神はみことばを通して、イエスを信じているあなたの心の中に働いて、あなたのうちにある罪を示してくれる、正しい方向に帰ってきなさいと神はあなたのうちに働くのです。イエスを信じていないあなたの心の中にも同様に働いてくださって、あなたは罪を犯している、神に逆らっている、罪を悔い改めて

神のところに立ち帰って来なさいと神は働かれるのです。このような働きをみことばは為すのです。なぜでしょう？続けてこう言います。「それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」（Ⅱテモテ3：17）と、そのために神は聖書のみことばをくださっているのです。ですから、パウロは神のみことばを忠実に語り続けた、そして、聖霊なる神はそのことばを使って人々の心の中に働かれて、罪を犯している者にそれを示され、そして、戒められたのです。もちろん、パウロ自身はそのようにしてみことばを語るときに、罪を犯している兄弟姉妹たちに直接にそれが間違っていると語ることは事実です。しかも、神のおことばを語って行くとき、特に私たちの先輩たち、イスラエルの人々がどんな罪を犯し、その結果どのような結果を自分たちの上に招いたのかということは私たちに大きな戒めになります。パウロはそのことを教えてくれます。Ⅰコリント10章で「…私たちの先祖はみな…」と1節から語り始めるのですが、エジプトの地をモーセに率いられて出て来た、様々なことを神はなされた、5節「にもかかわらず、彼らの大部分は神のみこころにかなわず、荒野で滅ぼされました。」6節から「これらのことが起こったのは、私たちへの戒めのためです。それは、彼らがむさぼったように私たちが悪をむさぼることのないためです。：7 あなたがたは、彼らの中のある人たちにならって、偶像崇拝者となっ

てはいけません。聖書には、「民が、すわっては飲み食いし、立っては踊った。」と書いてあります。：8 また、私たちは、彼らのある人たちが姦淫をしたのにならって姦淫をすることはないようにしましょう。彼らは姦淫のゆえに一日に二万三千人死にました。：9 私たちは、さらに、彼らの中のある人たちが主を試みたのにならって主を試みることはないようにしましょう。彼らは蛇に滅ぼされました。：10 また、彼らの中のある人たちがつぶやいたのにならってつぶやいてはいけません。彼らは滅ぼす者に滅ぼされました。：11 これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。」、6節、11節に「戒め」ということばが出て来ますが、これはコロサイ1：28の「戒め」と同じことばが使われています。ですから、私たちはみことばを伝え、みことばによって聖霊が働き、罪を戒めてくださって、正しい方向に導いて行ってくださる、同時に、私たちは過去の先祖たち、イスラエルの人々がどんなことを為したのか、その事例をもとに人々に対して戒めを与えることができる、だから、同じ罪を犯してはいけない、罪から離れなければいけない、神がこのように民を扱われた、私たちの聖書の神はこのような神だと人々に勧めを為すことができるのです。

また、同時に、時として私たちは直接的にあなたは罪を犯しているからその罪から離れなさいと言わなければならないときがやって来ます。そこで、そういった戒めを為して行くときに私たちが注意しなければならないことが二つあります。罪を犯している兄弟姉妹に対して、彼らを正しい方向に導いて行くとするなら、次のことに気を付けなければいけません。（a）愛をもってしなさい＝Ⅱテサロニケ3：15に「しかし、その人を敵とはみなさず、兄弟として戒めなさい。」とあります。「戒め」というと私たちはそこに愛を感じないし、愛の行為であるとはなかなか受け入れられませんが、聖書が教えるのはそれは愛の行為です。兄弟を本当に愛するのならあなたは間違っていると言わなければいけないのです。しかし、気を付けなければいけないことは、敵としてみなすのではなく、兄弟として行ないなさいということです。ガラテヤ6：1にも「兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」とある通りです。二つ目に気を付けるべきことは（b）ゴシップをしてはならない＝マタイ18章の中でイエスはこのように言われました。「また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。…」（15節）と、なぜイエスはこのように言われたのでしょうか？誰かが罪を犯しているのを知ったとき、あなたの責任はその人のところに行ってあなたは罪を犯していると言うことです。もし、それを他の誰かに言ったならそれ自体が罪であることを覚えなければいけません。あなたはゴシップを行なったのです。人の罪を他の人に言いふらしたのです。だから、人の罪を言いふらすとき間違いなくその人のうちには喜びがありません。間違ったことをしているからです。イエスはその人のところに直接行って、ふたりだけのところで言いなさいと教えます。それでその人が悔い改めなければ証人を連れて行きなさい、それでも悔い改めなければ教会に告げなさい、それでも悔い改めなければ除名しなさいと教えています。愛するからです。そうすることによって、その人が本当に正しい方向に立ち帰って来るためです。パウロはそのようにしたのです。パウロは罪を犯している兄弟姉妹たちに戒めを与えたのです。

（2）教える＝どのようにパウロはキリストを伝えて行ったのか、人々を一生懸命教えようとしたと言います。パウロはこの働きをそのような思いをもって為したのです。しかも、この「教える」という動詞も「戒め」と同じように現在形です。そのように彼は継続して習慣的に行ない続けたのです。彼は何を教え続けたのでしょうか？それは神のおことばです。コロサイ3：16に「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」とある通りです。パウロがこの箇所でも教えたことは、クリスチャンであるあなたがた

一人ひとりに何が必要か、あなた自身がしっかり神のおことばをうちに蓄えなさい、しっかり学びなさいということです。学んだならそれを互いに教え合いなさいと言います。つまり、神のすばらしさをあなたが学んだならそれを人々に伝えるということ、それを教えて行くということが一人ひとりの責任なのです。それが神がみことばを通してあなたに教えてくださっていることです。イエスが私たちに与えてくださった大命令、覚えておられますか？私たちがすぐに思い出すことは「**全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。**」です。でも、これは大命令の一部です。イエスがあなたに与えた一番大きな命令は「**弟子を作りなさい**」です。弟子を作るために出て行って福音を語るのです。私たちはイエス・キリストの救いのメッセージを語り、次にその人たちが成長するように教えて行かなければいけない、それが弟子を作るということです。彼らがみことばを通して、時には戒めをもって霊的に成長して行くように励んで行きなさいと。だから、パウロはⅡテモテ 2：2で「**多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。**」と言います。あなたがたが学んだことを他の人に伝えなさい、その人がまた他の人に伝えて行くからと。イエス・キリストを信じておられる皆さん、あなたの責任はこのすばらしいイエス・キリストをあなたの愛する家族に伝えることです、愛する友人に伝えることです。そして、それで終わるのではありません。願わくば、彼らが心からイエス・キリストを受け入れて救いに与って、そこから今度は彼らが成長して彼らが出て行って、このすばらしい救いのメッセージを伝えて行く者となって行くように、成長して行くように、あなたは教え続けて行かなければならないのです。これがパウロがコロサイ人への手紙の中でも教えていることでもあるのです。ある人が自分を再生することだと言いました。イエスを信じたあなたが自らを再生して行くのです。同じようにイエスを信じ、同じように神を愛して歩んで行く人を再生して行くようにと。

パウロはこのような働きを知恵をもって為したと教えています。コロサイ 1：28を見てください。「**私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。**」とあります。パウロがこのような働きをして行くとき、キリストを宣べ伝えて行くとき、彼は当然、神の知恵をいただきながら為して行きました。なぜ、パウロはここで「**知恵を尽くして**」と言ったのでしょうか？もしかすると、パウロの心の中にはこの当時コロサイの教会の中に入り込んできた異端、グノーシス派の人々の教えが頭にあったのかもしれませんが。なぜなら、もう皆さんに何度も説明したように、グノーシスというこのことばは知識という意味です。グノーシス派の人々が教会の中に持ち込んできた異端というのは、簡単にいうなら、彼らは聖書の教えから外れて別の教えを教え始めたのです。彼らは聖書の教えが余りにも単純だと考えて不満を覚えたのです。そこで聖書の教えを哲学に変えようとしていました。彼らは特殊な秘密の知識をもつことによって人は救われると言ったのです。この知識は余りにも深遠であり難しいので、自分たちだけが、すなわち霊的に最も優れ、選ばれた少数者のみが所有できる知恵なのだということを教えたのです。グノーシス派の人々は自分たちだけがこの特別な深遠な神秘的な知恵を知識を得ることができると、このように教えたのです。だから、一般の人が知識を得ることは不可能だ、特別な自分たちだけしか得ることはできないと、このように言ったのです。パウロが言うことは、とんでもない、誰でもその知恵を得ることができると、知識を得ることができるといことです。だから、パウロはこの知恵こそ、この知識こそ神に基づいたものであることを教えようとするのです。Ⅰコリント 1：22でパウロはこのように言います。「**ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。**」と、そして、24節には「**しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。**」とあります。つまり、パウロが言いたかったことは、人々はいろいろな知恵を求められ、本当の知恵はキリスト、イエスこそ本当の知恵だということです。そして、その知恵であるキリストのことが記されているのが神のおことばです。だから、知恵ある人というのはこのみことばを通して、神をより深く知ってそのみことばに従って行きたいとする人たちなのです。エレミヤがこのように言います。「**知恵ある者たちは恥を見、驚きあわてて、捕えられる。見よ。主のことばを退けたからには、彼らに何の知恵があろう。**」と、エレミヤ 8：9です。神のことばを退ける人々は知恵がない人々なのです。なぜなら、知恵ある人々は神のことばを受け入れようとするからです。だから、エレミヤが言うことは、知恵とは神のみことばを尊びそれに聞き従おうとするところに知恵があるのだということです。神の事を知ることによって私たちは知恵ある者として生きて行くことができるのです。このみことばを通して私たちはその知恵を得ることができるのです。

ですから、私たちはこのみことばを通してキリストを知り、そして、私たちはその教えられた真理、知識というものを毎日の生活に適用して行くことによって、知恵ある者として生きて行くのです。イエスご自身もこのように言います。マタイ 11：19「**…知恵の正しいことは、その行ないが証明します。**」と、つまり、その人が知恵ある者かいない者かというのはその人の行ないを見ればそれが分かるということです。そして、ヤコブもまたこのように言っています。ヤコブ 3：13「**あなたがたのうちで、知恵のある、賢い人はだれでしょうか。その人は、その知恵にふさわしい柔和な行ないを、良い生き方によって示しなさい。**」と、

生き方を見ればその人に知恵があるかないかが分かるというのです。知恵のある人はどれだけの知識をもっているかではない、もっている知識を毎日の生活の中で様々な状況の中で生かして行ける人です。私たちはいろいろな問題に遭遇します、その時に私たちはどのように学んできたみことばを適用して神の前に正しいことを選択して行くか、それができる人が知恵ある人なのです。だから、このように言えます。『上からの知恵、それは神を恐れみことばを尊ぶことによって、生活上のすべてのことについてみこころ、すなわち、何が神に喜ばれるかを判断し、選択して行くために、神が与えられる能力なのです』と。これが神からの知恵なのです。神の知恵をいただいている者は様々な状況にあって、どうすれば神を喜ばせるかを考えて正しいことを選択して行く、それができる人が知恵のある人です。

パウロはキリストを伝えました。そして、必要な者には戒めを与えました。そして、彼らを教え続けました。その時にパウロは知恵を用いました。そして、彼らがしっかりと聞いたみことばを実践できるように助けて行ったのです。それは、パウロ自身がみことばをただ聞くだけの者ではなくて、みことばを実践する者だった、知恵をもって生きている人だったからです。皆さん、あなたにとって大切なことはどのような状況に置かれていようと、その中にあって何をすれば神を喜ばせることができるのかとしっかりみことばを見ることです。みことばの教えていることに従って行くとき、状況は変わらなくても神はあなたのうちに働きます。パウロが様々な困難や大変な問題を抱えたときに、喜びをもって感謝をもって生き続けて行くことができた理由はそこにあるのです。

28節のみことばを見たとき「**あらゆる人を戒め、あらゆる人を教え…すべての人を、**」と。この1節の中に3回も出て来るといえるのはこれを強調したいからです。パウロはこのような働きを一部の人に限定したのではなかったのです。機会があればすべての人にこのような働きをしたいと望んでいたのです。パウロの同労者たちも同じでした。

一つ目に、パウロがキリストを宣べ伝えるときの注意事項として挙げたことは、その主題を忘れてはならない、あなたが語るべきメッセージは常にイエス・キリストに基づいたものでなければならない、つまらない人間的な話をしては何の意味もない、キリストを語りなさいと教えました。二つ目に教えることは、

2. 目的を忘れてはいけない

主題を忘れてはならないと同じように目的を忘れてはならないと教えます。それはこの28節の後半に出て来ます。「**すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。**」と。成人とは、霊的におとな、成熟した人のことです。パウロはエペソ人への手紙の中でも「**完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。**」（4：13）と言っています。この成人ということばは旧約聖書の中にも出て来ます。どのような人のことを指しているかと言うと、心が全く神に向いている人のことです。ですから、列王記8：61や11：4には「**主と心を全く一つにし、**」と表現されています。神と心が一つになっている人です。創世記6章にノアの話が出てきますが、ノアに関しても同じことが言われています。ノアは「**全き人であった**」（6：9）と、同じことです。心が神の方に向いている人、心が神と一つの人、そういう人が完全なおとなであり、成熟した者であり、成人であると、そのようにみことばは教えているのです。コロサイ4：12でも「**あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。**」、みこころをいつも十分に確信する、何が神の前に正しいことなのか、何が神のみこころなのか、しっかりそれを見極めて歩むような人、そういう人になって行くように祈っていますと、これが成長した人です。なぜなら、そのような歩みをしているならあなたは成長しますますイエス・キリストに似た者へと変えられて行きます。ヘブル人への手紙の著者が6：1で「**成熟を目ざして進もうではありませんか。**」と言っているように、もっと成長しなければいけない、もっと霊的に成長しなければいけないと、みことばは私たちに励ましを与えるのです。だから、一人ひとりが、あなたが完全な者に、より成長した者になって行くために、お互いに助け合いながら成長を促して歩んで行くことが必要だとパウロは教えるのです。

パウロが神からいただいたこの大切なメッセージ、このイエス・キリストを伝えようとした、神の真理を正しく伝えようとした、それをどのようにしたのか、このみことばは私たちに教えてくれました。パウロは様々な困難の中で神に忠実であり続けました。なぜなら、I. 困難の原因と目的を知っていたからと24節で教えてくれました。II. 主からの務めをいただいた、こんな者を神は信頼して大切な務めをくださったと、そのことを25節で教えてくれました。III. 主からのメッセージをいただいた、大切なメッセージを主は私に託してくださったと、そのことが25節の後半から27節のところ記されていました。そして、メッセージを語る際の注意事項が28節で教えられていました。四つ目に、

IV. 主からの力が必要

どんな困難の中でも忠実に歩み続けたパウロ、どうしてでしょう？それは彼が主からの力を知ってい

たからです。それが29節に出て来ます。パウロはクリスチャンとして生きることが非常に難しいことを知っています。「**労苦しながら奮闘しています。**」ということばを使って、信仰者としてこの世を忠実に生きて行くことが難しいと教えるのです。それは牧師であっても宣教師であっても、クリスチャンであれば誰でも、あなたが神により忠実であろうとするほどいろいろな摩擦を経験するのです。この地上にあって主に喜ばれる歩みをして行くことは大変です。この「**労苦しながら奮闘しています。**」と、パウロが言いたかったことは、ちょうど競技者が栄光を得るために一生懸命訓練をしている、栄冠を得るために一生懸命自らを鍛えている、そういう姿です。ですから、ここには「**疲れ果てる**」と「**苦闘する**」という意味をもったことばを使っているのです。Iテモテ4：10に「**私たちはそのために労し、また苦心しているのです。…**」とあり、また、IIテモテ4：7には「**私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。**」とある、この「**戦い**」ということば、これらは皆同じことばが使われているのです。クリスチャン生活は戦いである、様々な苦しみがある、パウロ自身がもうそれを経験したのです。皆さんもそのことを経験されているはずですが、しかし、それで彼は勇気を失ったのでしょうか？希望を失ったのでしょうか？否です。彼はその現実を見つめた上でまず神の方に目を向けるのです。彼はその働きの困難さを知っていただけでなく、働きの力がどこにあるか、そのことを知っていたからです。「**私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、**」とあります。自分のうちにキリストの力が力強く働いているのです。パウロは敢えてそのことをコロサイの人たちに伝えようとしたのです。クリスチャンであるあなたのうちにはすごい力が働いている、それはキリストの力である、つまり、キリストがもっておられたあの超自然的な力、その力があなたのうちに与えられているというのです。そして、そのキリストの力があなたのうちに働いていると言うのです。この29節の中で「**力強く働く**」とパウロは教えたのですが、敢えてこの箇所をもう少し忠実に訳すと、日本語ではおかしいのですが、「力でもって私のうちに働いているキリストの力によって」となります。つまり、私は力でもって働いて行くことができる、その力はキリストの力だと言うのです。ここで「**力強く働くキリストの力**」と敢えて「力」を加えているのは、パウロが使ったこの「**力**」は能力、あらん限りの力、肉体的知的の両方における力、また、霊的な力、そういう意味をもっているギリシャ語の辞典は私たちに説明を加えてくれるのです。ということは、パウロが言いたかったことが分かります、それはクリスチャンのうちに神から与えられている力というのがどんなに力強いものなのか、どんなに大きな力がクリスチャンのうちに与えられているかということを知りたいのです。だから、あなたはいろいろな問題にぶつかったときに希望を失ってはいけないというのです。神が命じるその命令を聞いたときに、できないからといって逃げてはいけないというのです。なぜなら、神の超自然的な力、キリストの力があなたのうちに与えられている、それだけではない、「**力強く働く**」というこの「**働く**」ということばを現在形を使って、この力がもうあなたのうちに働いていると言うのです。過去のこと、未来のことではない、パウロは今のその力が与えられ、その力が今あなたのうちで働いているということです。このことばの語源は「**活発な**」という意味があります。活動している、力を発揮しようとしている、そのように訳すことができます。つまり、神が私たちにくださったキリストの力は、私たちのうちからその力がどんなにすごいものであるかを発揮しようとしているのです。私たちがいろいろな問題に遭遇したときに、イエス・キリストをしっかりと見上げて信頼して歩んで行くときに、神は私たちのうちにすばらしいみわざを為してくださるし、これからも為してくださるのです。

「**上からの知恵**」と先ほど話しましたが、今度は「**上からの力**」とは何なのでしょう？『**神を恐れみことばを尊ぶこと**によって、生活上のすべてのことについてみこころ、すなわち、何が神に喜ばれるかを判断し、選択して行くために、神が与えられる力です。』、「**知恵**」というのはいろいろな状況の中で何が正しくて何が神に喜ばれるのか、それを考えてそれを選択して行く力です。「**力**」というのと同じように神の前に何が喜ばれるのかを考えて選択するだけではない、実際にそれを自分の生活に実践して行く力なのです。神はあなたに何が正しいのかを教えてくれるだけでない、その正しいことを実践して行く力を与え続けてくれるというのです。だから、パウロはIコリント15：10でこう言いました。「**ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。**」、パウロは自分の為したすばらしい様々な働きを自慢したいのではない、彼が自慢したいのは自分にこのような働きを為さしめてくださった神の力、神の恵みなのです。彼は知っていました。クリスチャンとして生きる上でいっぱい問題がある、しかし、神の備えてくださった力はそれに優るものであることを。クリスチャンの皆さん、失望していませんか？落ち込んでいませんか？希望を見失っていませんか？あなたの抱えている問題が大き過ぎてこれは不可能だと思いませんか？パウロも恐らく人間的には解決不可能な問題と思えることをたくさん経験しました。しかし、彼はそこで止まらなかった、後戻りしなかった、彼は神の力を信頼したのです。神さま、どうぞ、助けてください、あなたの約束してくださ

った、すでに与えられているその力によって、問題の中にあっても正しいことを選択し、実践して行けるように助けてくださいと、そして、栄光を現わしたのです。クリスチャンである皆さん、神はあなたがどんなところにいるかご存じです。神はあなたの抱えている問題をご存じです。その中であってわたしを信頼しなさい、わたしはあなたに力を与えたと言われます。それはそのような状況に負けないものであり、そのような状況の中で神のすばらしさを証する力です。だから、エペソ6：10でこのように言います。「**終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。**」と、力は与えられているのです。その力をいただいて生きて行きなさいと言います。

クリスチャンの皆さん、この神の力によって生きることです。力強く生きることです。希望をもって生きることです。なぜなら、この約束はイエスを信じたあなたのものであるからです。「**私もまた、自分のうちに力強く働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘しています。**」と、このキリストの力はイエスを信じたあなたにもう与えられています。この力によって生きてください。その時に、パウロがそうであったように、どんな困難でも、どんな問題でも、涙することがあっても、心苦しむことがあっても、その中で神よ、私はあなたを信頼しますと、その時、神はあなたの心に働いてくださって、パウロがもっていた喜びや感謝を、そして、勝利をもって生きて行けます。それが、パウロが私たちに教えてくれた大切な秘訣です。